

先天性梅毒における歯の形態異常の研究史

本間 邦 則

ハッチンソンは、一八五八（安政五）年に晩発性先天性梅毒の三徴候として、一、永久切歯の異常形成、二、実質性角膜炎、三、内耳性難聴について報告した。これについてメトロポリタン・フリー・ホスピタルの歯科医であるコーリマンは歯の異常形態の発現について協力研究した。それによれば、永久歯は矮小であり、まるい形態をしており、咀嚼により咬耗しやすく、エナメル質は軟かく、おそらくはカルシウム塩含有量は正常のものよりも少ないのではないかと思われる。歯槽弓もまた平均値以下である。乳歯の場合、萌出の時期がまちまちで、観察は困難である。幼児には水銀療法の原因とみられる口内炎の症例が認められるなどと述べている。

その後、先天性梅毒における歯の異常形態について、イギリスの外科医 Henry Moon (1845~1892) は一八八四（明治十七）年に大白歯の異常形態について報告し、フランスの皮膚科医 Jean-Alfred Fournier (1832~1914) は、梅毒患者の歯の形態を詳細に観察し、梅毒歯は磨耗しているのが多いこと、矮小形態が多いこと、とくに第一大臼歯の歯冠部は平坦な形が多いことを指摘した。そして梅毒歯の矮小形態を Microdontism と呼んだ。これらの報告のあと、Joseph Marie Jules Parrot (1839~1883) および Raymond Jacques Adrien Sabouraud (1864~1938) などから梅毒と歯との関係についての観察所見が追加発表された。

歯科臨床では、これらの梅毒歯の異常形態について最初の頃はとくに注目はしなかったらしい。それは歯科臨床において症例の少ないためでもあったろう。Jonathan Hutchinson の研究に協力した Alfred Coleman はその著書（一八八一、明治十四年）においてハッチンソンの業績を詳細に紹介しており、この時代になると歯科臨床でも知られることが多くなったものと思われる。

日本においても、明治八（一八七五）年に医術開業試験に「齒科」で受験した小幡英之助の試験問題の一項に「ハッチンソン氏齒に関することを問ふ」とある。小幡はこれに合格し、同年十月二日付で免状を下附された。したがって日本にはすでにハッチンソンの三主徴については紹介されていたことである。

（日本歯科大学新潟歯学部）

『聖濟総録』における歯牙疾患の分類

戸 出 一 郎

『聖濟総録』は北宋政和年間（一一一一～一一二七）に政府により編纂された医学全書である。戦乱のため金・元の時代になって校定刊行されたが、その後中国では大部分が散逸した。

日本では天文十六年、吉田意安が入明し、四年後、元刊『大徳重校聖濟総録』二〇〇巻をもち帰った。本書は文化十一年（一一八四）に日本で刊行され、日本聚珍版と称し、近年これを底本として中国で刊行された。

『聖濟総録』一一七巻から一二二巻までは口齒門で、そのうち一一九巻から一二二巻までが歯牙疾患の記述である。歯牙疾患は次の一六項に分類されている。

牙齒歴蠱・牙齒疼痛・齒蠶・虫蝕牙齒・腎虚齒風痛・齒風腫痛・齒斷腫・風疖・齒間出血・齒斷宣露・齒齲・牙齒